

9月18日セミナーリフレクション

講師：学びの共同体スーパーバイザー 木村芳博先生

ゲストティーチャー：小牧市立村中小学校 金内俊樹先生

小牧市立小牧中学校 川澄千佳子先生

小牧市立小牧中学校 合田亮介先生

テーマ：「学び合う『学び』を支える『授業』づくり」

とても楽しいセミナーでした。若い先生たちの真剣さ、誠実さ、前向きさを感じ、素敵なお話をいっぱい聴きました。少経験者限定のセミナーのはずでしたが、私が尊敬する先生方がたくさん参加され、なかなか自分で言葉にできないことを言葉にさせていただきました。この2時間に自分の成長を実感できました。隣の若い先生と語り、若い先生もずっと希望の光が見えたようでした。これもうれしく思いました。木村先生のおかげです。ありがとうございました。

学校で学ぶべきことは、教師、子どもの関心にかかわらず、あらかじめ定められているが、何をこそ、この授業で子どもに出合わせたいかという教師の願いが授業づくりの出発であり、それは何のために自分が教師をしているのかというアイデンティティにもかかわる。そしてそれは同時に、教師から子どもへの一方的な願いではなく、根源的には、子ども自身の学びたいという願いと結びついており、生きていることの意味を現実にするきっかけになりうる。こんなことを考えながら、話を聴かせていただきました。ありがとうございました。

<さらに学びを深めたいこと>

木村先生のような教師を育てる教師は、どう育ってきたのかは、教師教育の課題だと思います。学び合う学び研究所では、教師教育者の育成にかかわる研究や実践を期待しています。

子ども同士をつなぐこと、教材と子どもをつなぐことは、やはり簡単なことではないのだと感じました。私自身が、まず落ち着いて、我慢強く、子どもたちの様子をみて、どうかわっていきのか、どんな言葉をかけると、学びを引き出したり、深めたりしていけるのか、考え続けなければいけないと思いました。

子どもの生活と、つけたい力と結びつけていきたいと思いました。上手くいなくて、どうしようかと思ってしまうことが、毎日ですが、同じように悩み、良くしていこうとしているのだと分かり、少し安心しました。また、子どもたちが学びたい、知りたいと思える授業を準備していきたいです。根本も忘れないようにしていきたいです。

<さらに学びを深めたいこと>

子ども同士のつなぎ方について、身につけていきたい。

言葉がけ。間の取り方。時間の中で、子どもにつけたい力と、子どもの様子をみながら、教えるのか、考えさせるのか、調整する技術。

自分の意識していることや、頑張っていきたいことが、他の先生も同じように考えていたことが分かって、安心しましたし、心強かったです。「学び」の中心は子どもだということや、「学びたい！」と子ども自身が思うような手立てを考えていきたいと思いました。やりすぎても子どものためにならないことも感じました。授業の目標やねらいを明確にすることだけでなく、グループ活動における、目指したい子どもの姿も、明確にして日々励んでいきたいです。

授業づくりに対する悩みは、経験年数を重ねても、続くものであるということを聴けて、安心したのと同時に、この悩みを、前向きに受け止め、よりよい授業にするため、教師自身が学び続けなければならないと、改めて感じた。

<さらに学び深めたいこと>

いけないと分かっているけど、教材（教科書）を日々、計画通りに進めることばかり考えていたが、その中でも、教材の本質に迫ることができるよう、日々教材研究、および、授業づくりに努めていきたい。

生徒に教えたことがたくさんありすぎて、絞れていなかったが、シンプルがいいと言っただけ、教材研究を練り直したい。経験のある先生とお話できてよかった。

<さらに学びを深めたいこと>

美術科というのも関係していると思うが、先生同士の授業を見る機会が少ないので、偏りがあるのかなと思った。今後、交流して学び合いたい。

先生方の悩みや心がけていることなどを聞いて、私自身の悩みと同じところがたくさんあり、「他の先生も悩みながら授業をつくっているんだな」と少し安心しました。

また、先輩の先生方から、授業づくりに関する貴重な考えを聞いて勉強になりました。

来週から、また授業がはじまります。いかに、授業をコーディネートするか、子どもの疑問や発言を大切にしていきたいです。今日はありがとうございました。がんばる、意欲がうまれました。

<さらに学びを深めたいこと>

発問の質です。グループでしか解決できない、良質な発問についてさらに学んでいきたいです。

初任、少経験者に向けた研修を教職経験40年になる自分が受けて、常に自分に帰って考えさせていただきました。日頃、意識できていないことが多くて、あせりました。つまり、教師の授業づくりは「何年経っても、同じことをするということ」なのだと思います。

今、教職課程の学生と「授業づくり」をテーマに探求していますが、「子ども主体」と「探求と協同」を強調しています。しかし、彼らが受けてきた授業は、5、6年前のことであっても「一斉授業」であり、それを脱することに、学生自身が苦勞しています。

本当の意味で、子ども主体の授業づくりが、当たり前になる、日本教育であって欲しいと願っています。

木村先生のお話により、教師としての姿勢を明確にしたうえでの、子ども主体の学びのあり方を、学ぶことができました。ありがとうございました。

焦点を絞った発問をつくる必要がある。教材研究を重ねることが、不可欠である。

教師は、教えることに中心が行ってしまい、何を生徒が学ばなければならないかを忘れてしまうことがある。目標の精選が大事である。

<さらに学びを深めたいこと> 教材研究を深めること

木村先生が初任者指導で、日ごろ取り組んでいる姿が想像できた。よい指導者に恵まれるかどうかは、初任者にとって影響が大きい。指導者同士の学び合いも、大切だなあと感じました。

「三つの管理」のところで「管理」に後ろめたさを感じられたが、「マネジメント」とすれば

と感じた。

「学び合う学び」を何のためにするのか。

どのように取り組んでいくのか、大切なことは何か。今まで、いろいろな人に教えてもらったことが、今日、整頓されたように感じました。

“学ばせたいこと”を明確にし、それを“学びたい”に変革していくことは、特に自分の中でも納得できました。ですが、やりすぎても、子ども本来の学びたいものを消してしまうのではということも忘れてはいけないと感じました。また、火曜日から頑張れそうです。

<さらに学びを深めたいこと> ICTを活用して、子どもと子どもをつなげる授業

実生活に生きることについて、先輩の先生の「SOSが出せる子ども」という言葉がとても印象的でした。どの教科でも共通してつけない力と、美術ならではのつけない力を大事にしたいと思いました。

劇的に興味を引く手立てを考えようとするよりも、身近で素朴な疑問に気づける手立てを考えていきたいなと思いました。「時間」はいしきしつづけやすいから、すぐに思いつくことができましたが、「言葉」と「活動」はできなかったのも、あまり意識できていなかったなと痛感しました。

この前の、道徳の授業で、終わりごろに「なぜ、女の人のズボンがいいのに、男の人のスカートは気持ち悪いと思ってしまうのか」について、一人の生徒と盛り上がりました。この部分に、もう少し早くたどりついたかったな……と思いつつ、授業の後でも話が続いて、少しうれしかったです。道徳でも、普段の生活で意識できる課題や疑問に出会える授業にしていきたいです。

改めて、子どものための授業であることを確認しました。私が行っている授業は、子どものために行っているふりをして、自分が満足するためにやっている授業なのではないか？と迷ってしまいました。ペアを組んでいただいた先生より、教えていただいたことが多く、教師は、子どもを支える立場であることを教えていただきました。

<さらに学びを深めたいこと>

たくさんあります。このセミナーに来る前は「聴く」ことの難しさを感じながらやってきました。今も、もちろんそのことの難しさを課題と捉えています。もっともっと前に、子どものための授業を考えていく必要があると感じました。

先生が、子どもたちの学びたい気持ちを引き出す。⇔ 子どもたちが先生の手立てを待つようになってしまう。

中島先生や副島先生のお話を聴き、授業づくりにおける新たな視点をいただいたように思います。

授業において「手立て」は必要なものだと思いますが、それが子どもたちの自ら課題を発見したり、探求したりする姿勢を奪うようなものにならないよう、心がけていきたいと思いました。

<さらに学びを深めたいこと>

本当の意味で、子どもたちの学ぶ意欲を引き出すことを考え、意識して、授業づくりを行っていききたいと思います。

3名の先生の発表はとてもいい学びになった。木村先生の言葉にも力があり、新たな意見をもつことができた。

<さらに学びを深めたいこと>

このコロナの状況で、どれだけ「学び合う学び」が続けられるのか不安である。やれることをやっていけばいいと思うが、やれることもやっていないのではないかと心配する場面を目にする。